

戦場の知識人たち

——越北言語学者・金壽卿の朝鮮戦争手記より——

板垣 竜太

ITAGAKI Ryuta

はじめに

私は、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）で活躍した言語学者・金壽卿（1918～2000）の評伝を準備している（人文書院より近刊）。準備過程で出会った資料が、彼自身による朝鮮戦争手記『リュックのなかの手帖を開いて（김 스기온 배낭속의 수첩을 펼치며）』である。この手記は朝鮮戦争の休戦（1953年）から40年余りを経た1994年に脱稿されたが、公刊されないまま、平壤とトロントの遺族のもとに原稿として残されている。この手記について、既に私は論文でその内容を詳細に分析している（板垣2017a, b；以下「前稿」と呼ぶ）。ただ、紙幅および論文全体のまとまりという観点から省いた部分がある。それは金壽卿が戦場で出会った知識人（研究者や学生を含む）についての記述に関する考察である。その部分は評伝でも挿入しない予定だが、資料的価値が高いと判断し、この場で紹介するものである。

というのも、北朝鮮の知識人は、一般にその著作物に経歴等を書くという慣行があまりない。所属を明記しないこともあるし、場合によっては著者の個人名すら出さずに発行されるものもある。そうしたことは、「功名主義」「出世主義」「個人主義」など、「ブルジョワ」的なものと結びつけられていたためだと思われる。そのため、個々の知識人の学歴や職歴などが判然としないケースが多い。政治的な変動期などに姿を見せなくなり、そのためその後には語られなくなる者もある。し

かし、言うまでもなく個々の知識人は、それぞれ個性的な人生を歩んだ人間である。金壽卿は、当時自らが所属していた金日成綜合大学（김 일성 종합대학）の教員や学生を中心として、戦場でのエピソードを記すとともに、ときにその人物の戦争勃発前や戦後（＝朝鮮戦争後）のことも書き記している。その意味で、朝鮮戦争下の知識人らの様子を断片的であっても伝えているこの手記は、金壽卿個人の体験記であることをこえて、北朝鮮の知性史にとって貴重な情報源となる。

本稿で私はあえて「知識人」という語を用いる。北朝鮮で研究者に相当する語は「科学者」であり、科学、教育、文化芸術、出版報道等に携わる人々を総称するときに「知識人」や「インテリ」の語が用いられてきた。学生はこれに含まれないこともあるが、本稿で登場するのは金日成綜合大学の学生や研究生（＝大学院生）である。同大学は「政治、経済、文化各分野で自らの国をうまく建設し発展させることのできる民族幹部」¹⁾を養成するために1946年に創立された最高学府であり、その学生をここで知識人に含めておいても問題なかろう。他の社会主義国と同様に、北朝鮮でも知識人は一つの社会階層（階級ではなく）と考えられており、その意味で場合によっては労働階級にも資本家階級にも服務し得る存在とみなされていた²⁾。すなわち、知識人は社会的に指導的な役割を果たすことを期待されたが、南北分断状況を背景として、一步間違えば「反動的」な思想を広める「反党分子」にもなり得るという両面

的な存在とされていたのである。

この知識人の両面性は、朝鮮戦争下において深刻なものとして立ち現れた。朝鮮戦争は、勃発した1950年だけでも、朝鮮人民軍の南下（6月～）、米軍を主力とする国連軍の参戦による北上（9月～）、中国人民志願軍の参戦による再南下（11月～）と、アコーディオンのように戦線が大きく動き、前進と後退、敵と味方、占領者と被占領者が入れ替わった³⁾。金壽卿と会ったあとに戦死してしまった人物もいる。南に「帰順」するなどして「行方不明」となった人物もいる。無事生還したが、その後批判されて、知識人としては姿を消した人物もいる。そうした流動的な状況に置かれた知識人の揺れ動く姿を、この手記から垣間見ることができるのである。

以下、まず資料としての手記の特徴および言及された知識人の全体像を把握したうえで（1）、まず金壽卿の研究上の「同志」にあたる言語学者に関する記述を読み解く（2）。そして、それ以外の知識人のなかで、比較的詳細に言及されている人々について検討する（3）。

1 金壽卿が記録した知識人

前稿の内容と重なるが、まずは手記の性格について確認しておきたい。

この手記は、金壽卿が戦争勃発後に平壤を出発し（1950年8月9日）、38度線を南北に行き来しながら、再び戻ってくるまで（1951年3月3日）の約7ヶ月間の回想記である。その路程は複雑だが、金壽卿自身はこれを次の5つの過程に分けている（本稿附録を参照）。

- ①第1次南進過程（1950. 8. 9～9. 27）：他の大学教員とともに、朝鮮半島南半部の朝鮮人民軍の占領地区に派遣される。朝鮮半島南西端の珍島^{チンド}に配置され、政治講習をおこなう。

- ②一時的後退過程（1950. 9. 28～10. 31）：米軍を主力とする国連軍の仁川^{インチョン}上陸作戦以降、形勢が逆転したことを受け、金壽卿は平壤への自力での帰還命令を受ける。徒歩で北上し、故郷である江原道^{トンチョン}通川^{フエヤン}を経て、淮陽郡^{トナムニ}道納里で朝鮮人民軍に入隊する。

- ③朝鮮人民軍に入隊して（1950. 11. 1～11. 25）：軍とともにさらに北へと後退し、山間地帯の慈江道^{ジョンチョン}前川郡^{ナムフンニ}南興里で宿営する。この時期、中国軍の参戦（1950年10月下旬）により、再び戦況が逆転する。

- ④第2次南進過程（1950. 11. 28～1951. 2. 17）：中朝両軍は、戦線をさらに南に押しやるために、38度線をこえて第2軍団（軍団は師団の上の単位）を投入し、「敵後方」から回り込んで「第二戦線」を構築しようという作戦を11月下旬以降進める。金壽卿は南興里で除隊となるはずだったが、所属師団の政治部長からその語学力を買われて、この危険な南半部侵入の任務に投入される。

- ⑤朝鮮人民軍を除隊して（1951. 2. 18～3. 3）：南半部にて除隊命令を受け、平壤に帰還する。

彼は、この約2,800 kmの道程をほぼ歩いて移動したが、その途中で日付と場所だけを記したメモを残していた。これが「リュックのなかの手帖」である（本稿付録で全訳したので参照されたい）。それをもとに、彼は1993年8月から手記を書きはじめ、1994年11月に脱稿した。全体は45章で構成され、400字詰の原稿用紙に換算して約300枚分の分量がある。

この手記が書かれた背景には、離散家族の存在があった。金壽卿が平壤から南に派遣されたときには、妻・李南載^{イナムジェ}、4名の子、母、妹と、金大官舎で同居していた。しかし、この戦争の最中に、

この家族全員は金壽卿を探して南へと移動してしまっただけで、すなわち行き違いとなってしまったのである。李南載や子どもらは、その後、1970年代にカナダのトロントへ移住した。金壽卿と李南載がお互いの居場所を知り、平壤とトロントのあいだで文通が可能となったのは1986年のことだった。

要するに、金壽卿がこの手記を執筆した主要な目的は、家族生き別れの原点となった朝鮮戦争のときに、自らが何をしていたのか、どのような思いでいたのかを、離散家族に対して伝えることにあった。金壽卿は手記の序文のなかで、「記憶に残る戦火の日々のできごとを書き残してみることは、私の家の子どもたちや後代の教養として参考となる部分も多少あるだろう」と考えて、これを書くことにしたと述べている[7]（以下、同手記を参照、引用する際には、未公開原稿に振られたページ番号を、このように〔 〕で括って表記する）。

しかし、金壽卿が手記を単に家族のためのものとして位置づけていたとは考えにくい。前稿で触れていたように、金壽卿が手記を書くきっかけとなったのは、1993年7月に開催された全国老兵大会に参加し、周りから執筆を勧められたことにあった。その意味では、公刊することもある程度想定していた可能性があるし、少なくとも家族以外の知っている人々が読むことは念頭においていたと考えてよからう⁴⁾。先ほど引用した一文で「後代の教養」と表現していることから、この手記を後代に残しておくべき歴史的記録としても位置づけていたと考えられる。

以上を踏まえたうえで、手記に書かれた知識人について検討しよう。表1は、手記で言及されている人物のうち、大学教員や学生（卒業生を含む）など、28名の知識人を、本文に登場する順番に整理したものである。ほぼ全て戦場で彼が会

った人物だが、金壽卿の母方の叔父にあたる^{リ ジョンシク}李種植（ID 28）だけは、その金壽卿が消息を聞いたものである。手記では全て実名が記されているが、姓しか記されていないケースや、名前が書かれていないケースもある。会った場所が1カ所であった場合はその地名、ある一定区域において行動を共にした場合は「始点～終点」の形式で示している。記述の詳細さは相当異なり、1-2行程度しか言及されていない者から、^{リョム ジョンニョル}廉宗訥（ID 17）のように数ページに渡ってエピソードが語られる者までいる。

なぜ、手記にこのようなさまざまな知識人についての記述が含まれていたのか。第一の理由は、手記の宛先に関わっている。李南載は金壽卿と結婚した1943年以来、越北後も、彼の友人や同僚とも付き合いがあった。そのため、手記のなかに登場する人物のなかには、彼女が知っている人物も含まれていたと考えられる⁵⁾。また、全国老兵大会で執筆を勧められた経緯からすれば、共通の知り合いもそこに入っていたと考えられる。その意味では、手記にさまざまな人名が実名で登場する理由の一つは、想定される読み手も知っているであろう人物が、朝鮮戦争中どのような様子だったかを記しておくことだったといえる。

第二の理由として考えられるのは、ある意味当然のことだが、戦場で知り合いに偶然出会うということ自体が喜ばしいことであり、記憶にも印象深く刻まれていたため、書き記したということである。たとえば南の^{モッポ}木浦で、金大法学部教員の^{リヤン ヒョク}梁赫（ID 10）と、よく知っていた語文学部の学生の^{パク ビョンファン}朴炳勳（ID 11）と出会ったとき、「客地で思いがけず同郷の人と会うことがこれほどにも嬉しいものなのか」と、海辺の食堂で^{チヤンオ}うなぎを食べたことを記録している[21]。つまり、朝鮮戦争前の金壽卿の人的ネットワークが主として知識人だったからこそ、結果的に知識人に関わるエピソード

ソードが記憶に残ったということである。

おそらくこの2つの理由は両方とも正しいし、
相矛盾するものでもない。いずれにしても金壽卿
の手記は、地名や人名も正確であるし、諸々の記

述を他の資料と付き合わせても矛盾なく付合す
る。以下それを読み解いていこう。

表1 『リュックのなかの手帖を開いて』に登場する知識人

ID	名前	章	戦前所属	地位	会った場所	戦時下所属・任務	その後	内容
01	崔學善	5	金大歴史学部	教員	高陽	南半道で政治工作	—	虚弱で遅れ
02	申源雨	6	金大朝鮮語学科	教員	平壤～光州	全羅南道で政治工作	〔越南か〕	共に派遣
03	黄富永	6	金大朝鮮語学科	教員	平壤～光州	全羅南道で政治工作	朝鮮語学者（～1960s）	共に派遣
04	田喜秀*	6	金大朝鮮語学科	教員	平壤～光州	全羅南道で政治工作	—	共に派遣
05	金弘基	6, 19	金大歴史学部	教員	平壤～全州	全羅北道で政治工作	戦死	共に派遣；共に後退
06	姜大昌	6, 45	金大歴史学部	教員	平壤～全州	全羅北道で政治工作	〔行方不明〕	共に派遣
07	呉鴻錫	6	（京城帝大英文科出身）		全州～長城	故郷の長城郡党で活動	—	共に食事
08	金學鉉*	7, 8	清津教員大学	教員	光州～珍島	共に珍島で政治工作	行方不明	珍島でのこと
09	呉氏	7, 8	元山教員大学文理学部	教員	光州～珍島	共に珍島で政治工作	行方不明	珍島でのこと
10	梁 赫*	8	金大法学部	教員	木浦	木浦郡党で活動	—	共に食事
11	朴炳勳*	8	金大朝鮮語文学部	学生	木浦	木浦郡党で活動	—	共に食事
12	車日平	8, 19	金大歴史学部	研究生	光州～襄陽	全羅南道党宣伝部、羅州郡党で活動	投降	金壽卿の人事；共に後退
13	金大吉*	9	金大予備科	科長	光州	光州市党で活動	行方不明	秋夕に祝杯
14	盧載仙*	9	金大哲学科	学生	光州	光州市党で活動	—	—
15	金春徳*	14	金大朝鮮文学科	学生	聞慶島嶺	全羅北道の郡党で活動	—	共に嶺を越える
16	朴義星	22	金大朝鮮語学科	学生	紅樹皮嶺	人民軍兵士	朝鮮語学者（～1970s）	道で偶然出会う
17	廉宗訥	22, 29, 36	金大露文学科	学生	淮陽～前川	求禮郡党→人民軍入隊	朝鮮語学者（～1990s）	人民軍に共に入隊；共に再南進
18	沈在潤	22, 29	金大哲学科	教員	淮陽～前川	不明→人民軍入隊→除隊	〔1956-58に地方追放〕	人民軍に共に入隊；除隊
19	盧大奎	28	金大外国語文学部	教員	前川	人民軍師団指揮部	1950sに大学を去る	宿営地で再会
20	姜庸俊*	31	金大党委員会	委員長	平康	人民軍軍官	—	道で再会
21	嚴武鉉	31	平壤歴史博物館	館長	金化	第2軍団指揮部	—	軍団指揮部で会う
22	田蒙秀	31	金大朝鮮語学科	教員	金化	第2軍団指揮部	〔戦死〕	軍団指揮部で会う
23	南正鉉*	39	平壤医学大学	卒業	咸境南道	第2師団軍医	海州医学大の病理解剖学教員となり1970sに病死	手袋の素材調達
24	朴炳八*	39	金大	卒業	—	第2師団歴史記録参謀	—	—
25	—	41	金大歴史学部→大学党指導員	卒業指導員	平昌	第2軍団指揮部	—	金壽卿の除隊手続
26	黄東植*	42	労働新聞社	記者	平昌～平壤	第2軍団報道部	—	共に除隊
27	—	43	金大経済学部→元山農業大学	卒業教員	横城	第2軍団後方部	—	軍服と軍靴を支給
28	李種植	45	金大法学部	教員	—	—	金大教員	夫人（金壽卿の叔母）と会う

（備考）「名前」の*印は漢字表記未確認のため同音の漢字を当てたものである。「章」は、その人物が言及されている手記の箇所を示す。「所属」の「金大」は金日成総合大学の意味である。「その後」で、手記に書かれていない内容を板垣が補足した場合には〔 〕で括って表記した。（～1960s）といった表記は、その年代まで論文公表が確認されるという意味である。

2 言語学者たち

当然のことながら、手記のなかで最も多く言及されているのが朝鮮語学者である。教員または後に教員になる者だけでも申源雨（ID 02）、^{ファン・ブヨン}黄富永（ID 03）、^{チョン・ヒス}田喜秀（ID 4）、^{パク・ウイソン}朴義星（ID 16）、^{リョム・ジョンニユル}廉宗訥（ID 17）、^{チョン・モンズ}田蒙秀（ID 22）が挙げられ、この他に学生の名前もある。このうち最初の3名は、ただ平壤～ソウル～光州と行路をともにしたという以上の記述は無いので、残る3名についてここでその記述を紹介、検討しよう。

このうち最重鎮といって差し支えない朝鮮語学者が田蒙秀（ID 22）である。田蒙秀は、解放前から朝鮮語学会で方言、古語、語源、『訓蒙字会』等に関する論文を公表していて活躍していたが、その経歴は不明である（イ・サンヒョク 2007：19）。解放後は北朝鮮を代表する朝鮮語学者の1人となった。1945～50年の短期間に『朝鮮語源誌』（於・ソウル、1947年）、『訓民正音釋解』（洪起文との共著、於・平壤、1949年）といった本のほか、音韻論等に関する論文を多数公刊している。金日成総合大学では語文学部長を務めた。また、当時、朝鮮語文研究会が国家的プロジェクトとして編纂した『朝鮮語文法』の編纂委員長を務めた。田蒙秀は朝鮮戦争中に戦死したが、これについて『金日成総合大学10年史』（金大1956：107）は、次のような比較的長い記述を捧げている。

田蒙秀先生は、敵後方闘争の任務を担当した連合部隊の責任ある地位で政治活動に服務し、果敢な闘争を展開した。長期間にわたる敵後方闘争において、彼は戦士・大衆に対し、勝利に対する確固たる信念と党や祖国に対する無限の忠誠心を教えた。敵後方戦闘の困難で熾烈な条件に勝ち抜きながら、彼は自

らの文章と言葉をすべて捧げて戦った。田蒙秀先生が属した連合部隊が敵後方の任務を果的に実行し、最終的な勝利を迎えようとする最後の時期に、彼は朝鮮人民の最終的な勝利と祖国科学の無窮な発展を祈りながら、壮烈に戦死した。著名な朝鮮語学者であり、革命的闘志である田蒙秀先生の輝かしき偉勲は、綜合大学の革命的伝統のなかに長く刻まれるだろう。

こうしてみると、金壽卿が回想する田蒙秀は、生前最後の姿の描写といえるかもしれない。その点で貴重な内容である。

金壽卿が戦場で田蒙秀に会ったのは、彼が「第2南進過程」と呼ぶ途上においてであった。1950年12月17日から18日にかけて、金壽卿の所属する部隊は^{キムファ}金化郡^{クンナム}近南面^{ヤンジ}陽地里で宿営した。金化郡は38度線よりは北にあり、朝鮮戦争前は北朝鮮地域であったが、戦争中に郡域全体が南北に分断された。その過程で近南面は南側に入った（現在も同面は南側の^{カンウォン}江原道^{チョルウォン}鉄原郡に属している）。それほど激戦地である。

当時、部隊が宿営していた村から6kmほど離れた所に第2軍団指揮部が置かれていた。前線が近く、「米軍の飛行機が飛び回っており、道ばたには敵飛行機の機銃掃射を受けて倒れた牛が何頭も転がっている」ような場所だった[98]。金壽卿は、その政治部に田蒙秀と、金日成大学歴史学部の元教員で平壤歴史博物館に館長として移っていた^{オム・ムヒョン}嚴武鉉（ID 21）⁶がいるという話を聞き、牡丹雪の降り積もるなか、歩いて訪ねて行ったのである。会話を交わしたのは30分ほどのことであった。この年配の2人は、金壽卿と同様に南半部に行って工作活動をおこなっていた。しかし後退の途中に金化の境界線に残って活動し、第2軍団に入ることになった。そのため正式な軍服もまだ

支給されておらず、間に合わせの綿入りの服に、手で縫った長い足袋^{ボツン}を履いているような状況だった。そこまでは記述されているが、会話の中身までは手記に残されていない。その理由は不明ながら、田蒙秀のような年配の研究者でさえ、戦時下でかなり厳しい状況に置かれていたことが、ここから垣間見ることができる。

残る2人は、朝鮮戦争勃発当時、まだ学生だった。朴義星（ID 16）は朝鮮語学科の卒業班（卒業年度の学生）にあり、金壽卿の直弟子ともいえる存在だった〔65〕。手記によれば、朴義星は「2年前に生活上の過誤を犯すできごとがあった」ため、労働党に入党できないでいた。そのためか戦争勃発後も、他の学生がほぼ全て人民軍か政治工作隊として次々旅立っていくなか、彼はしばらく後方に残っていた。だから戦地にあつて金壽卿も、「この戦争の峻厳な状況で、彼は今どこで何をしているかと、常に心配していた」。

金壽卿が朴義星に偶然出会ったのは、「一時的後退過程」の1950年10月30日のことだった。金壽卿は、南から自力で後退してきて、故郷の江原道通川^{トンチオン}に行った。しかし、通川は艦砲射撃などで破壊されており、家族も親戚も誰もいなかった。失意のなか故郷を離れ、平壤へ向かって険しい紅樹皮嶺^{ホンヌピリョン}を登っている途中に、牛1頭を引いて山をとぼとぼ登っている人民軍兵士がいた。それが朴義星だった。彼は、学生も教員もキャンパスを去ってしまったあと、人民軍への入隊を熱烈に嘆願し、その結果として兵士として戦場に出ることになった。かなり遠く南側にまで行き、そして後退してくる途中で偶然牛1頭を入手し、それを引っぱって自分の部隊を探しているところだったという。手記によれば、彼はその後、金壽卿よりも早く除隊し、大学に戻って語文学部の教員として任命された。戦時期には、金壽卿と朴義星は「同じ部屋で長いあいだ過ごした」という〔66〕。

戦時期には金日成大学全体が疎開しており、その際に部屋が一緒だったということであろう。その後間もなく朝鮮労働党員にもなれたと記されている。このように金壽卿と近い間柄にあった彼は、その後の彼の研究においても重要な役割を果たすことになる。

そして、金壽卿が最も多くのページを割いて書いているのが廉宗訥（ID 17）である。廉宗訥の場合は、戦争勃発当時に金日成大外国文学部のロシア語科3年生だったので、戦争前から金壽卿が知っていた学生ではなかった。金壽卿は1950年10月30日、すなわち彼が朴義星に会ったのと同じ日に一夜を過ごした淮陽郡道納里^{フエヤン トナムニ}の家で、廉宗訥と初めて会った〔66〕。廉宗訥も政治工作隊の一員として全羅南道の求禮^{クレ}で活動し、金壽卿とはほぼ同じ日に光州^{クワンジュ}から後退しはじめ、ここで偶然出会ったのだった。廉宗訥は道納里において、金壽卿とともに人民軍に勧誘され、入隊することになった1人である。

実はこの同じタイミングで人民軍に入隊した人物がもう1人いる。沈在潤^{シム ジェユン}（ID 18）という金日成大哲学科の教員である。言語学者ではないが、彼もここでの叙述に密接に関係しているので、話を進める前に彼について述べておこう。沈在潤の朝鮮戦争前後の経歴について手記では何ら明らかにしていないものの、相当の人物である。沈在潤は、1904年に慶尚北道達城郡に生まれ、早稲田大学経済学部在学中から共産主義運動に関与し、投獄された経歴をもつ。出所後、中国に渡り、延安などで抗日運動に関わった⁷⁾。同じ哲学科の元同僚で、1997年に衝撃的な亡命を果たしたファンジャンヨプ^{ファン ジャンヨプ}の回顧録にも沈在潤は登場する（黄長燁1999: 97, 138-140）。それによれば、沈在潤は解放後に平壤経済専門学校の校長に任命された後に、金日成綜合大学の教員となった。しかし、1956～58年のいわゆる「反宗派闘争」（「分派」

とされた政治指導者層の粛清)のなかで、延安派として批判され、平安北道に追放されたという。このような経歴の持ち主なので、金壽卿は光州クワンジュからの後退の道をともにしていたにもかかわらず、あまり戦時期以外のことを書かなかったのかもしれない。

さて、道納里では金壽卿、沈在潤、廉宗訥の3人がともに人民軍への入隊を促されたのだが、そのうち廉宗訥だけはすんなり決断しなかった。彼は、「先生方〔＝金壽卿と沈在潤〕は大学教員ですから戦争が終わればすぐに除隊となるでしょうが、私は学生なので一生軍隊で服務しなければなりません」と入隊を躊躇したのである [86]。そのときは金壽卿が説得したことで入隊に応じたという。それで3人は、結果的に一緒に人民軍に入隊した。

部隊が宿営した南興里で、3人はよりシビアナ岐路に立たされた [85-91]。先述のとおり、金壽卿はもう一度南進する作戦に参加してほしいと所属師団の政治部長に懇願された。沈在潤は、金日成大の仕事に復帰するために除隊することになった。一方、廉宗訥は学生身分なので、そのまま部隊に残ることになっていた。彼はこのことを不服に思った。そこで彼は、除隊する沈在潤に懇願し、部隊には無断で、一緒に金日成大について行くことにした。部隊が南進をはじめる2日前の晩遅く、廉宗訥はその決意を金壽卿にこっそり伝えに来了。金壽卿は、今度は止めなかった。その翌朝、廉宗訥は、中朝国境地帯に疎開していた金日成大に向かって、沈在潤の後ろに付きしたがってひそかに立ち去っていった。無断で学生が部隊を離れたことを知った政治部連隊長は、烈火のごとく怒った。その怒りの矛先は、学生を制止できなかった金壽卿に向けられた。どうして見過ごしたのかと、金壽卿は激しく叱責された。

ところが、その晩には廉宗訥がまたふらりと部隊に戻ってきた。話を聞けば、2人はしばらく黙々と歩いて行ったが、昼食をとったあと、沈在潤が廉宗訥に対して急に辛辣なことばをぶつけはじめた。すなわち、なぜ無断で部隊を離れたのか、それは自由主義であり規律違反ではないのか、党を裏切るつもりがないのなら引き返して部隊に戻れ、と言ったのである。そこで廉宗訥は1人で戻ってきたのだという。金壽卿は「終日胸のなかに垂れ込めていた帳のようなものが、一挙にどこかに翻って飛んでいくのを感じ」、喜んだ。といっても当然、廉宗訥は政治部連隊長にこっぴどく叱られ、頭を丸めさせられた。しかし、政治部連隊長は廉宗訥に中隊の書記を任せ、38度線を越えたあとは政治部中隊長にも任命したということである。

廉宗訥はその後挙げた戦績により、1951年の2.8節(朝鮮人民軍創建記念日)に勲章やメダルを授与されたり、1953年には中国を訪問する人民軍代表の1人として選ばれたりもした。大学に復帰したのちには、朝鮮語学科に転科し、卒業後には朝鮮語学講座の教員となった。そしてこの部門の卒業生のなかで誰よりも早く博士、教授となったと、金壽卿は手記で述懐している。廉宗訥は1960年代に金壽卿と共著を出してもいるし、1990年代まで朝鮮語学の分野で業績を公刊しつづけた。そうした人物だからこそ、若い頃にはこのような迷いもあったことを、失敗の克服談として金壽卿は書こうとしたものと思われる。

朴義星と廉宗訥の2人は、おそらく戦場でも苦難をともにした弟子たちということで、このように比較的詳しく書かれているのであろう。これ以外にも金壽卿は、自らが教えたことのある学生と戦場で会った場面では、朝鮮語学専攻であつてもなくても、親しみをこめて「弟子」^{チュエジャ}と呼びながら描写している。聞慶峠では同じ科の3年生の

金春徳 (ID 15) と出会い、ともに険しい山道を越えた。咸興出身の彼女は「腹を空かしたこともなく幸福に暮らしてきた」が、このときは空腹を金壽卿に訴えた。金壽卿が少しすえた麦飯のおにぎりしかないと言うと、金春徳は「それでもください」といって仲間と分けて食べた。金壽卿は「同情心を禁じ得なかった」と所感を書いている [44-45]。軍医の南正鉉 (ID 39) は平壤医科大学の学生だったが、戦争前に友人と何度か金壽卿を訪ねてきたことがあり、「本当の弟子と違いがなかった」。金壽卿は偶然会った南正鉉に、厳冬を過ごすために手袋を手に入れられないか相談した。数日後、彼は物資不足で手袋は見つからず、代わりに布の端切れを何とか入手して持ってきてくれた。たばこの葉を巻く紙切れの調達も難しい時期のことだったので、金壽卿は彼の誠意に感謝した [119-121]。指揮部所属の卒業生 (ID 25) は、金壽卿の名を師団名簿で見つけて除隊するのに一役買ったし、後方部の倉庫長をしていた卒業生 (ID 27) も金壽卿を記憶していて、新しい高級軍服と軍靴を支給してくれた。このように金壽卿は戦場での再開の喜びとともに、「弟子」への共感と感謝のことを記している。

一方、朝鮮語学者であってもあまり記述されていない知識人もいる。黄富永 (ID 03) は 1950 年代末に金壽卿を公然と批判したこともある人物で (板垣 2014: 403-404)、それがさほど記述のない原因かもしれない。田喜秀 (ID 04) は経歴が全く不明である。また、申源雨 (ID 02) は、1936 年に京城帝大の朝鮮語学・朝鮮文学専攻を卒業した人物だが⁸⁾、いつ越北したかは不明である。金日成総合大教員として朝鮮戦争中に南に派遣された後に、北では行方不明となったことになっており (金大 1956: 108)、亡くなったか、あるいは戦時下に越南した可能性もある⁹⁾。ともあれ、記述の濃淡には、戦場での金壽卿との関係のみなら

ず、朝鮮戦争後の経歴などが影響しているものと考えられる。

3 去っていった人たち

朝鮮語学者以外で、金壽卿が手記で記述している知識人は、金泓基 (ID 05)、姜大昌 (ID 06)、金學鉉 (ID 08)、呉氏 (ID 09)、車日平 (ID 12)、盧大奎 (ID 19) である。最初の 5 名は朝鮮戦争中に死去または行方不明となった人たち、最後の 1 名は朝鮮戦争後に行方不明になった人である。金學鉉 (ID 08)、呉氏 (ID 09) は珍島への派遣で金壽卿と一時期をともにし、後退できずに行方不明になった研究者だが、かれらについては別稿 (板垣 2017b: 114-115, 128) で述べたので、以下その他の人々について書こう。

このうち金泓基 (ID 05) と車日平 (ID 12) は対照的な存在として描かれており、おそらく金壽卿は何らかの「教訓」のつもりでエピソードを叙述したのではないかと考えられる。金泓基は 1939 年に京城帝国大学予科に入学し¹⁰⁾、歴史学を専攻していた。1948 年に越北し、最高人民会議の代議員に選ばれ、金日成総合大学歴史学部で朝鮮史の教員となった。戦争勃発後は全羅北道で政治工作をおこない、後退の途中に金壽卿と合流した。一方の車日平は立教大学で西洋史を学んだ人物で、解放後に金日成大に所属していた¹¹⁾。車日平は朝鮮戦争後、南部の光州にあった全羅南道党で活動していた。そのとき珍島郡党の名簿に金壽卿の名を発見し、不安に思って光州市党への異動を道党幹部にかけあってくれた。そのおかげで、金壽卿は珍島が再占領される前に光州に行くことができた (板垣 2017b)。珍島に残った教員 2 名はついに島から抜け出せなかったことから、金壽卿は手記のなかで彼に対して率直に「感謝の念を禁じ得ない」と記している [25]。車日平は、全羅南道道党と羅州郡党で働いたのち、

1950年9月28日から金壽卿とともに光州から後退した。

ともに北へ向かって後退していた金壽卿がこの2人と別れることになるのは、38度線の少し手前、襄陽ナムデーチョンの南大川という川においてであった[17章]。金壽卿らは川を渡らずに襄陽ヤンヤン邑に向かう道を探すことにしたのだが、金泓基、車日平らはその方針を受諾せず川を渡ること選択した。かれらは後退途中に潭陽タミヤンの郡党において1人あたり韓国紙幣で3万ウォンずつ渡されていたのだが、38度線を越えると金が使えなくなると思った金泓基、車日平らは、川向こうの村に行って食用犬を買って食べてから行こうと考えたのだった。金壽卿は呼び止めたものの、川のなかでの論争の末、かれらはそれを振り払って行ってしまった。

金壽卿がこの2人の消息を聞くことになるのは、それから1年半ほど経った1952年春のことであった[19章]。その分かれた一行のなかには金日大経済学部フニヤンの学生とばったり会ったのである。その学生によれば、川のなかの論争で主張していたとおり、一行は対岸の村で犬肉を買って食べた。そこから金壽卿らに追いつこうとして進みはじめたところ、目の前に韓国軍の1個師団が現れた。そこでかれらは東海岸側に行くのを断念し、前線に沿って内陸部の楊口ヤングや麟蹄インジェの方に向かって進みはじめた。そして江原道フビョンの後坪に集結していたゲリラ部隊に合流し、再び南に向けて進軍したのだという。

「後坪」は、江原道洗浦郡セボにある村の名前である。1950年9月以降の朝鮮人民軍の後退局面において、南部での遊撃隊によるパルチザン活動が本格的に組織化された。李承燁リ スンヨブ（1905-54）が率いる部隊と、智異山チリサンを中心としたゲリラ活動を展開した後に北上してきた李鉉相イ ヒョンサン（1905-53）の部隊とが11月1日に合流したが、その場所が後坪だった。当時、既に中国の人民志願軍が参戦して

おり、再び戦局が変化していた。そこで李鉉相部隊は、後退途中にこの地に集まってきていた人員などを加えて部隊を再編成し、11月14日に再び南に行軍を開始した。これがのちに「南部軍」と呼ばれるようになるゲリラ部隊である（イ・ソナ 2015）。金泓基、車日平はこの南部軍に入り、その一員としてパルチザン活動に参加したのである。一方、この話をしてくれた大学生は、まだ学生身分であり故郷も北半部なので「平壤へ戻れ」と言われて、一人で後退することになったのだという。

その後この学生が聞いた話によれば、金泓基は智異山の方面に向かって戦闘の犠牲になった。一方、車日平は韓国軍の捕虜となり、韓国軍にいた自分のかつての弟子の勧誘で転向し、南で生き延びているということだった。このうち車日平の足取りは、ある程度資料から確認される。車日平は、江原道を出発するときに副司令官を任された（イ・ソナ 2015: 115）。彼は1951年12月の韓国軍による智異山討伐作戦の過程で生け捕りにされた。彼は捕まった後に手記を書かされており、その内容は当時の韓国の新聞でも公表されていた¹²⁾。ただ、その後の足跡は不明であり、同名の研究者が韓国で活動した形跡は見られない。

金壽卿は、金泓基の妻についての記述も書き加えている。彼女は朝鮮戦争中に夫を探してソウルから北朝鮮にやってきた。彼女は医学研究者であり、その後、医学博士、労力英雄、最高人民会議の代議員になったが、これは金泓基に対する党と国家の評価でもあったと金壽卿は記している。名前は記されていないが、この妻とは、微生物学者として知られ、愛国烈士陵にも祀られている。兪淑根ユ スックン（1921-2001）のことである（キム・スヨン 2014）。兪淑根は細菌学者・兪日濬ユ イルチュン（京城医学専門学校最初の朝鮮人教授）の娘で、京城女子医専を卒業して助手・講師となった。朝鮮戦争中お

よびその後感染症（腸チフス、麻疹など）の予防方面で活躍したことが評価され、女性の科学者として最高水準の名誉を受けた。理由は不明ながら、兪淑根の夫が金泓基であることについては北朝鮮のメディアでは隠蔽されており¹³⁾、その関係で金壽卿も妻の方の名前を書かなかったのかもしれない。

締めくくりに金壽卿は2名の金大教員の言動について評価した。「かれらが私の意見を聞いて、対岸の村に行かず襄陽邑に行っていたならば、無事に平壤に帰り新たに任された重要な事業もたくさんできたのではないかと残念がっている[58-59]。その意味では、2人とも期待される研究者だったわけである。しかし、金泓基は「英雄的な犠牲」とする一方で、車日平については「卑劣な行動」と対照的に評価した。そして、これを「人生の価値、社会経済的生命的の貴重さ」を考えるためのエピソードとしたのである。

次に、金壽卿が言及している姜大昌（ID 06）について見てみよう。姜大昌は1916年に慶尚北道の奉化^{ボンファ}に生まれ、福岡高等学校を経て1937年に東京帝国大学文学部東洋史学科に入学した。1940年に卒業した後は、細川嘉六らのもとで中国研究を進めた。金壽卿は、この頃に東京帝大の大学院に行っていたが、その頃から姜大昌と知り合いだった[144]。1943年に神奈川県で検挙され、1945年に釈放後、朝鮮に戻った。1946年に越北し、金日成綜合大学の教員となった¹⁴⁾。大学での当初の担当科目は「革命運動史」と「哲学」であった。戦争勃発後、政治工作隊の一員となり、金壽卿や金泓基とは平壤から全州まで一緒に行った。金壽卿は、全羅北道の道党合宿所で8月末に姜大昌と別れたのちには、その消息に接する機会がなかった。

金壽卿が再び姜大昌のことを聞いたのは、1951年3月に平壤に戻ってきた日のことだった[45

章]。金壽卿が、金日成大の許憲^{ホン}総長宅に入ろうとしたとき、その家から1人の女性が出てきて、彼に矢のごとく近づき、胸に顔をうずめて鳴咽しはじめた。よく見ると、彼女は姜大昌の妻の日本人女性であった。金日成大学の官舎では隣どうしたたので、お互いよく知っていたのである。彼女は、なぜ自分の夫と同じ日の同じ時間に出発したのに1人だけで戻ってきたのかと、胸を叩いてきた。金壽卿は、消息は知らないが近いうちに平壤に帰ってくるだろうと言うのが精一杯だった。だが、その後、姜大昌が平壤に戻って来ることはなかったし（金大1956:108）、その日本人女性のその後についても知られていない。

最後に、金壽卿が1章を充てて記述した盧大奎（ID 19）について述べよう[82-85]。金壽卿は、次のように彼の経歴を紹介している。

盧大奎先生についていえば、ソウル大学〔京城帝大〕の哲学科を私よりも何年か前に卒業した先輩で、大学を出てから開城松都中学で英語教員をして、その後平壤に来てある中学校の教員をしているうちに解放を迎えた。金日成綜合大学が創立された当初から英語教員^{ヨンガン}をすることになった。故郷は平安南道の龍岡^{ドンギョ}で、彼の兄盧東奎同志は解放前にソウルの延禧専門学校の政治経済学教授として活動した著名な学者で、日本帝国主義に反対する秘密組織のメンバーとして活動して犠牲になった烈士だった。

この叙述の正確さは、資料からも確認される。盧大奎は、1912年に平安南道龍岡郡^{ヨンガン}に生まれた。地元の普通学校を卒業した後、平壤高等普通学校を経て、1931年に京城帝国大学予科に入学した。1936年には法文学部哲学科を卒業した。京城帝大時代に兄・盧東奎の影響でマルクス主義の書籍

を読んだという。卒業後は寧邊崇徳学校、開城松都中学校で英語教師した後、平壤の母校で教員をしているうちに解放を迎えた。教育局での勤務を経て、1946年に金日成綜合大学の創立メンバーとして英語を教えることになった¹⁵⁾。また、その兄の盧東奎（1904～？）は、1924年に延世大学の前身である延禧専門学校の商科を卒業後、京都帝国大学経済学部で選科生として3年間学んだ。1928年、23歳の若さで延禧専門学校の講師となり、朝鮮農業経済論を中心とした論文や評論を30本ほど公表した。しかし1938年、「経済研究会事件」に連累することになり、白南雲ベクナムンや李順鐸イスンタクとともに検挙され、1940年まで収監された。出獄後、間もなくして彼は亡くなった（洪性讚2015）。

金壽卿が1950年8月に南に向けて出発したとき、盧大奎は平壤にまだ居残っていた。大学の英語教員は、開戦後すぐに民族保衛省か内務省に召喚されたのに、彼だけは召喚されなかった。金壽卿は、「彼があらゆる現象をあまりに批判的かつ鋭利に見ており、単純な発言もしない人物だった」から召還が保留になったと推測している。換言すれば、盧大奎は何らかの舌禍により国や党から信用されていなかったという話である。

その盧大奎が、1950年11月20日ころ、宿営していた南興里にいる金壽卿をとつぜん訪ねてきた。彼は、金壽卿らが平壤を発つて間もない時期に人民軍に入隊した。彼は崔賢チエヒョンが指揮していた第2師団の指揮部に配属され、英語の翻訳や通訳をしながら洛東江ナクトンガンの前線まで進出したのちに後退してきた。後退途中、彼は2師から6師に所属が変わった。6師の部隊は南興里から8kmほど離れた所に宿営した。ある軍官から、2師にも外国語がよくできる金日成大教員が1人いるという情報を聞き、年格好から間違いなく金壽卿だと思って、すぐに訪ねて来たのだという。その晩はちょ

うど大隊の兵士らがとうもろこしを煮詰めて水飴を作っていた。2人は、オンドルのきいた奥の間で、もらった水飴を舐めながら、夜が明ける頃まで話し込んだ。

2人は除隊後に大学で再び同僚として働くことになった。しばらくして彼は戦時期の功勞により労働党に入党した。「しかし戦争が終わって何年か後に彼が大学を去ることになり、悲しいことに、それ以降再び会うことはなかった」という[85]。その正確な時期や理由は記されていない。金壽卿は、「盧大奎先生は高度な知性をもった人だったため、社会のさまざまな現象に対しても人間関係においてもあらゆる否定的なもの、非正常的なものに対していつも鋭く批判のまなざしを向け、そのたびごとに仮借無く自分の考えを言い放つ人だった。そうした特殊な性格だったので、一部の人たちとはそりが合わないのも当然だった」[83]と彼のことを評している。つまり、そうした彼の性向がわざわざいして何らかのかたちで陥れた可能性があるとし唆している。

それにしても朝鮮戦争によって、あるいは戦後間もない時期のさまざまな政治的対立によって、どれほど数多くの知識人たちが北朝鮮の学界から、そしてこの世から消え去っていったことか。こうしてみると、金壽卿が朝鮮戦争を生き延び、その後浮き沈みこそあれ、辛うじて1990年代まで活躍し、この手記を書き残し、天寿を全うしたことは、何やら紙一重ですり抜けてきた奇跡のように思えてならない。

おわりに

ここまで金壽卿の朝鮮戦争手記を通して、戦場での知識人たちの姿を垣間見てきた。この手記は、金日成や朝鮮労働党への賛辞が随所に見られ、仮に公開されても問題にならないような叙述になっているが、その一方で、公刊された文献で

あればここまで揺れ動く知識人たちのリアルな様相は描けなかっただろうと考える。

この手記を下敷きに書かれたと考えられる小説『人生の絶頂』（リ・ギチュン 1996）と対照してみれば、その違いは明らかである。同作品には金壽卿とその周りの人物が実名で登場しており、たとえば本稿で紹介した廉宗訥（ID 17）と沈在潤（ID 18）もやはり出てくる。といっても廉宗訥はロシア語科ではなく英文科の3年生ということになっており、沈在潤は哲学科ではなく歴史学部の教員ということになっている。小説では、金壽卿とともに3名が全員「第二戦線」構築のための南進部隊に投入されることになる（pp.122-126）。沈在潤がここで除隊することもないし、廉宗訥が逃げようとすることもない。南進過程では、廉宗訥が金壽卿と同じ部隊にいて、除隊も一緒ということになっている（pp.134-140）。その途中では、廉宗訥が米軍捕虜を流ちょうな英語で通訳して、南朝鮮の通訳官を驚かせたりもしている（pp.132-133）。「大学に入る前までは、ようやく文字を解読する程度の作男」^{モスムクン}（p.133）だったところから、愛国心に燃えた勇ましい学生へと変貌した模範青年として登場しているのである。『人生の絶頂』のこうした描写は、金壽卿を記述した箇所においても同様である（板垣 2017b: 137-138）。この小説には、敵と味方、熱烈な愛国者と姑息な卑怯者のマニ教的世界観しかない。

それに対して『リュックのなかの手帖を開いて』は、決して一面的ではない知識人たちの姿をリアルに描いている。一面的でないからといって、単に「両面的」だということでもない。本稿冒頭で、北朝鮮での知識人の両面性について言及したが、これは大きなポリティクスとして設定されたものであって、金壽卿はその意味において忠誠と反逆の役割葛藤を抱いて生きる存在として知識人たちを描写しているわけではない。そこで叙

述されているのは、ただ「英雄」的でも、ただ「姑息」でもない、等身大の存在である。学生の身分ではなかなか除隊できないと逃げていた廉宗訥（ID 17）、後退のための資金として支給された韓国紙幣を食糧に使用しようと隊列からはぐれて南部軍に入り、別々の運命をたどった金弘基（ID 05）と車日平（ID 12）、あまりに鋭利な批判精神をもっていたため出世の道から外れた盧大奎（ID 19）などは、そうした様子がとりわけよく描かれている。無数の岐路に立たされ、一歩間違えば自分自身もどうなるか分からなかった戦場から、九死に一生を得て平壤に戻った経験があるからこそ、金壽卿は他の知識人たちの言動を単純に「人ごと」とはみなせず、さまざまな運命の軌跡を、断片的であれ、再現できたのだろう。そうした意味において、金壽卿の手記『リュックのなかの手帖をひらいて』は、戦場に出た北朝鮮の知識人たちのリアリティに接近するためのさまざまな素材を提供してくれるのである。

〔註〕

- 1) 金日成「民主主義的国家建設に献身する人材となれ：金日成総合大学開校式の席上で陳述した訓示（1946年9月15日）」（金日成 1954: 265-268）による。
- 2) 金日成「わが党のインテリ政策を正確に貫徹することについて：咸境北道のインテリたちの前でおこなった演説（1968年6月14日）」（金日成 1969: 528-564）などが代表的である。
- 3) 当時ソウルに住んでいた歴史学者の金聖七^{キム ソンチル}（1993=1997）の日記は、こうした変動の様子が生々しく記録されている。
- 4) 実際、1996年には作家リ・ギチュン（1996）により金壽卿を主人公とした小説が書かれたが、朝鮮戦争部分はこの手記をベースに創作されたものと考えられる。ただし内容はかなり脚色されている。同作品については「おわりに」で言及する。
- 5) 実際、金壽卿が1986年以降に李南載に送った書簡には、周囲の人々の消息を伝えるくだりがあるところに見られる。
- 6) 嚴武鉉は1905年に慶尚南道の金海に生まれ、1931

年に京城帝大法文学部の史学科を卒業した後、1年間、同学科で助手となった。その後は間島（現在の延辺）の龍井や延吉の諸学校で教員、副校長、校長を歴任した。解放後は、中蘇韓文化協会委員長、間島臨時政府文教科長を経て、1946年に金日成大学の教授に就任、さらに平壤第三中学校校長も兼任した（以上、NARA RG#242「金大教員履歴書 文学部」より）。

- 7) 以上は、韓国の国家功勲処ウェブサイトの独立有功者功勲録（管理番号 41548）より（<https://e-gonghun.mpva.go.kr/user/ContributeReport-Detail.do?goToCode=20002>）。
- 8) 『京城帝國大學一覽 昭和十一年』1936年、263頁。
- 9) 同徳女子大で定年退職まで国語学の教鞭を執ったのち、1991年に逝去した同名の研究者がいるが、同一人物かどうか確認できていない。
- 10) 『京城帝國大學一覽 昭和十四年』1939年、286頁。
- 11) 金壽卿は車日平のことを「研究生」すなわち大学

院生と呼んでいるが、1949年に教科書『古代希臘史』をロシア語から翻訳出版しており（『고대희랍사: 종합대학 사범대학용』교육성, 1949）、教鞭をとっていたと思われる。

- 12) 『서울신문』1951년 12월 24일.
- 13) 朝鮮中央放送が1999年10月26日に「時代を抱いて生きる真の科学者（시대를 안고 사는 참된 과학자）」というプログラムのなかで兪淑根の生涯を紹介したが、そこで夫は「炭鉱労働者出身の青年」ということになっている（『연합뉴스』1999. 10. 28）。
- 14) 姜大昌「自叙傳」1947年9月付（NARA, RG 242の「一九四七年度 金日成大學發令件」に所収）による。履歴書に付された「自叙伝」は、自らの経歴を散文で説明したもので、ソ連で導入され北朝鮮でも一般化した人事書類だった（Halfin 2011, キム・ジェウン 2020）。
- 15) 以上は「金大教員履歴書 文學部」による（NARA, RG 242 文書）。

【参考文献】

【刊行資料】

- Halfin, Igal, 2011, *Red Autobiographies: Initiating the Bolshevik Self*, University of Washington Press.
- 洪性讀 (Hong Söng-ch'an), 2015, 「노동규의 생애와 학문」『한국경제학보』22(1).
- 黃長燁 (Hwang Jang-yöp), 1999, 『나는 역사의 진리를 보았다: 황장엽 회고록』한울.
- イ・サンヒョク (I Sang-hyök), 2007, 「해방후 초기 북쪽 국어학 연구의 경향」『어문논집』56.
- イ・ソナ (I Sön-a), 2015, 「지리산권 뽕치산의 형성과 활동」『남도문화연구』28.
- 板垣竜太 (Itagaki Ryuta), 2014, 「월북학자 김수경 언어학의 국제성과 민족성」, 신주백編『한국 근현대 인문학의 제도화: 1910~1959』해안.
- , 2017 a, "Language and Family Dispersion: North Korean Linguist Kim Su-gyöng and the Korean War, *Cross-Currents*, 6(1): 151-176.
- , 2017 b, 「リュックのなかの手帖——越北した言語学者・金壽卿の朝鮮戦争と離散家族」板垣・鄭炳旭編『日記からみた東アジアの冷戦』同志社コリア研究センター.
- 金日成 (Kim Il-söng), 1954, 『김일성 선집 제1권』조선 로동당 출판사.
- , 1969, 『사회과학의 임무에 대하여』조선로동당출판사.
- 金日成綜合大學 (Kim Il-söng chong-hap dae-hak) [「金大」と略], 1956, 『김일성종합대학 10년사』김일성종합대학.
- キム・ジェウン (Kim Jae-ung), 2020, 『고백하는 사람들: 자서전과 이력서로 본 북한의 해방과 혁명, 1945~1950』푸른역사.
- 金聖七 (Kim Söng-ch'il), 1993, 『역사 앞에서: 한 사학자의 6.25 일기』창작과비평사. (李男徳・館野哲訳, 1997, 『ソウルの人民軍——朝鮮戦争下に生きた歴史学者の日記』社会評論社.)
- キム・スヨン (Kim Su-yön), 2014, 「북한 여성 의과학자 유숙근 (兪淑根)」, RiCKS 次世代研究者フォーラム・第9回 (立命館大学コリア研究センター・同志社コリア研究センター, 2014年8月3日) 報告論文集.
- リ・ギュチュン (Ri Gyu-ch'un), 1996, 『삶의 메추리』금성청년출판사.

【未公開資料】

金壽卿遺族（トロント在住）所蔵資料

金壽卿朝鮮戦争手記原稿『오직 한마음 당을 따라 북남 7 천리／배낭속의 수첩을 펼치며／한지식인의 조국해방전쟁참전수기 (1950. 8. 9-1951. 3. 3)』(1994 年 11 月脱稿).

金壽卿家族宛書簡 (1986~1999 年).

米国国立公文書館 (NARA) 所蔵資料 RG #242 [NARA RG #242 と略]

NM-44 299 D / Box #221 (SA 2006/12/32. 1). 「一九四七年度 金日成大學發令件」. 北朝鮮人委教育局.

NM-44 299 Z / Box #1061 (SA 2011/7/31). 「金大教員履歷書 文学部」.

【定期刊行物】

『서울신문』, 『연합뉴스』, 京城帝國大學『京城帝國大學一覽』各年版.

〔付録〕

以下のテキストは、金壽卿による未公刊手記『リュックのなかの手帖を開いて (배낭속의 수첩을 펼치며)』の「附録 1」の全文を訳出したものである。前稿 (板垣 2017b: 139) では最初と最後の部分のみを抜粋して紹介していたが、今回は「附録 1」の全訳である。以下、前稿で記したことと重なるが、まず、この「『リュックのなかの手帖』に記録された『日記』」という資料がどのように成立したかについて確認しておきたい。

手記の序文によれば、金壽卿が平壤を出発したとき、「戦争が長く続くものと予見し得なかったので、何か記録や日誌のようなものを書こうという計画を立てていなかった」。しかし、南方の珍島^{チンダ}まで行ったのちに、後退することになったとき、「不意に私は、こんなに多くの場所を通過するのだから、日記は書けないにしても通過した地点ぐらいは記録しておかなければならない」と考えた。

といっても、その時点で彼の手元には筆記具も紙切れもなかった。そこで、まず平壤を出発してからの通過地点を日付とともに思い出し、しっかりと記憶に刻んでおくことにした。後退途中の農家で、小ぶりの手帖と鉛筆の切れ端をようやく手に入れた。その手帖に、「その日まで頭に記憶しておいた地点を書き、その翌日からは日々の記録を残すことにした」。テキストの「I. 第1次南進過程」と、その後の部分で記述の密度が違うのは、このためである。

また、テキストを見ると、11月28日にはじまる「IV. 第2次南進過程」からは、日付に加えて時間が記入されている。南進にあたって記述を詳しくしたわけである。駐留していた南興里で時計が支給されたのかもしれないが、新たな軍服と軍帽 (中国からの支援物資) および軍靴 (チェコからの支援物資) の支給については記されている一方、時計については何も記述がない。物資不足で、武器すら十分に支給されない事実上の「徒手部隊」だったことを考えると、時計の新規支給があったとは考えにくい。所属していた師団の政治部にある時計を参照したのかもしれないし、あるいは、もともと時計は持っていたが、危険な任務に就くにあたって、それまで以上に詳しく時間を記録することにしたということかもしれない。

このテキストは、その手帖にその都度記録した日記そのものではなく、金壽卿自身による清書を経たものである。再び序文によれば、1951年に除隊し、金日成綜合大学の職場に復帰した金壽卿は、当時疎開中の大学の教員集結所があった中和郡南串面の市場でノートを買ってきた。彼はそのノートの前半部分には言語学理論の図書を抜粋した。その残りの10頁余りに、「祖国の統一独立のために——祖国解放戦争の時期に私が歩いた道 (조국의 통일독립을 위하여 - 조국해방전쟁시기 내가 걸은 길)」との題目で、リュックに入れて戦場から持ち帰った手帖の内容をそのまま引き写した。書き写した時期は明記されていないが、そのノートを「40年余りものあいだ、私の部屋の棚の中に保管していた」ということなので、戦場から戻って間もない時期だったと考えられる。その「古色蒼然としたノート」を、1993～94年の手記執筆に際して、金壽卿自身が「附録 1」として再び書き写した。I～Vの見出しを付けたのは、ノートに書き写した時点か、手記の執筆時点のどちらかだろう。

金壽卿はこの手記を何らかの手段でトロントの離散家族に渡そうとしていたが、思いがけずも1995年に脳血栓をわずらい、自由にもものを書くことができなくなった。そこで、平壤の家族がトロントの家族のために手記全体を筆写し、1996年の長男の訪朝に際して手渡した (手写や手渡しといった方法が採られるのは、コピーや郵送が自由にできるわけではないためである)。以上、計3回の手写を経た「リュックのなかの手帖」のテキストが、今回の翻訳に際して私が参照した底本となった。

原文は全てハングルで記されている。そのほとんどが地名である。したがって訳出といっても、その地名がどこにあるかを確認し、その漢字表記を探し出すという作業をおこなうことになった。そのために、戦前に製作された『朝鮮半島五万分の一地図集成』 (陸地測量部作製、学生社復刻版、1981年) や、韓国で発行された『最新北韓地圖』 (佑晋地圖文化社、1991年) を参照するとともに、ときに越智唯七編『新舊對照朝鮮全道府郡面里洞名稱一覽』 (中央市場、1917年) も活用した。それでも漢字名が不明なものは、同音の漢字を当てて*印をつけた。また、固有語による地名についてはハングルを〔 〕で併記した。丸括弧 () や角括弧 [] は金壽卿自身による符号である。「?」や「未詳」といった表記も、金壽卿自身によるものである。私が補ったりした箇所は亀甲括弧〔 〕で記している。なお、前稿 (板垣 2017b: 110) に、路程をプロットした地図を掲載しているので、合わせて参照していただきたい。

《リュックのなかの手帖》に記録された《日記》

I. 第1次南進過程

1950. 8.9. 平壤 発. (大同江駅) [汽車]
8.10. 黒橋駅 着 発.
8.11. 新幕 着.
8.12. ♪
8.13. ♪
8.14. 新幕 発 [徒歩]
8.15. 汗浦着. 発.
8.16. 開城 着.
8.17. ♪
8.18. 開城 発, 長湍 着.
8.19. 長湍 発, 汶山 着.
8.20. 汶山 発, ソウル 着.
8.21. ソウル.
8.22. ソウル 発.
8.23. 水原 着, 発.
8.24. 烏山, 西井里, 平澤, 成歡 着.
8.25. 成歡 発, 天安, 小井里, 広德里 着.
8.26. 広德里 発, 公州, 胎封里 着.
8.27. 胎封里 発, 利仁, 論山, 全北 皇華面 着.
8.28. 皇華面 発, 全州 着.
8.29. 全州.
8.30. 全州 発, 井邑 着.
8.31. 井邑 発, 長城 着.
9.1. 長城 発, 光州 着, 光州 発. [自動車]
9.2. 木浦 着.
9.3. 木浦 発. [発動船]
9.4. 珍島 着.
9.4~21. 珍島郡党にて事業.
9.21. 珍島 発 [徒歩], 鹿津 着.
9.22. 鹿津 発 [モーターボート], 右水宮 着, 右水宮 発 [徒歩], 海南 着.
9.23. 海南 発, 靈岩 着.
9.24. 靈岩 発, 羅州 着.
9.25. 羅州 発, 光州 着.
9.25~28. 光州市党にて事業.

II. 一時的後退過程

1950. 9.28. 光州 発 [徒歩], 潭陽, 淳昌, 淳昌郡 仁溪面 着.
9.29. 淳昌郡 仁溪面 発, 鎮安郡 白雲面 (シンクワン山 [신광재]) 着.
9.30. 鎮安郡 白雲面 発, 長水郡 天川面 春松里, 溪北面 白巖 着.
10.1. 溪北面 白巖 発, 徳裕山麓 通過, 茂朱郡 茂豊面, 雪川面, 永同郡 龍化面 肇東里 着.
10.2. 肇東里 発, 加里駅 (京釜線横断), 永同郡 龍山面 着.
10.3. 龍山面 発, 慶尚北道 尚州郡 牟西面 着.
10.4. 牟西面 発, 尚州郡 化西面 着. (徹夜行軍)
10.5. 化西面 発, 東觀里 (俗離山麓) 着.

- 10.6. 東観里 発, 尚州郡 (未詳) 着.
- 10.7. 尚州郡 (未詳) 発, 聞慶郡 (未詳) 着.
- 10.8. 聞慶 (未詳) 発, 聞慶郡 梨花嶺 (山上) 着.
- 10.9. 梨花嶺 (山上) 発, 鳥嶺 通過.
- 10.10. 聞慶面 葛坪里 着.
- 10.11. 葛坪里 発, 忠清北道 丹陽郡 大崗面 着.
- 10.12. 大崗面 発, 竹嶺 前山〔앞산〕着.
- 10.13. 竹嶺 前山 発.〔徹夜行軍〕
- 10.14. 竹嶺 通過, 丹陽郡 佳谷面 着.
- 10.15. 佳谷面 発, 永春面 儀豊里 着.
- 10.16. 儀豊里 発, 江原道 寧越郡 下東面 臥石里 着.
- 10.17. 臥石里 発, 旌善郡 南面 山上 着.
- 10.18. 南面 山上 発, 旌善郡 南面 部落 着.
- 10.19. 南面 部落 発, 東面 部落 着.
- 10.20. 東面 部落 発, 北面 部落 着, 骨只川 通過.
- 10.21. 江陵郡 魯鄒山 通過, 平昌郡 山上部落 着.
- 10.22. 平昌郡 山上部落 発, 平昌郡 道巖面 部落 着.
- 10.23. 道巖面 部落 発, 大關嶺道路 通過, 五台山 通過, 五台山麓 部落 着.
- 10.24. 五台山麓 部落 発, 松川鉾山 通過, 江原道 襄陽郡 県南〔県北〕面 漁城田里 着.
- 10.25. 漁城田里 発, 38度線通過, 襄陽郡〔降峴面〕沔湍里 着.
- 10.26. 沔湍里 発, 杆城 着.
- 10.27. 杆城 発, 猪津, 松峴里 着.
- 10.28. 松峴里 発, 高城郡 花雨里 着.
- 10.29. 花雨里 発, 長箭, 濂城, 通川 正里 着.
- 10.30. 正里 発, 道一里, 紅樹皮嶺, 淮陽郡 道納里 着.
- 10.31. 道納里.

Ⅲ. 朝鮮人民軍に入隊して

- 1950. 11.1. 道納里 発. (2師4連隊1大隊宣伝員として任命される)(徹夜行軍)
- 11.2. 安邊郡 瑞谷面, 徳源郡 赤田面 武羅里 着.
- 11.3. 元山-陽徳間 道路 通過. (徹夜行軍)
- 11.4. 文川郡 晩浦里, 文川郡 雲林面 禾羅里 着.
- 11.5. 禾羅里 発, 高原郡 上山面 部落 着.
- 11.6. 上山面 部落. (戦闘, 米軍自動車43台を鹵獲し焼却)
- 11.7. 上山面 部落 発, 浮來山駅 通過, 高原郡 多三浦里.
- 11.8. (徹夜行軍)
- 11.9. 定平郡 豊陽里 着.
- 11.10. 定平郡 豊陽里 発. (徹夜行軍)
- 11.11. 永興郡 文上里 通過. (徹夜行軍)
- 11.12. 平安南道 寧遠郡 新成面 部落 通過, 大興面 廣通里 着.
- 11.13. 廣通里.
- 11.14. 廣通里 発, 社倉, 寧遠郡 小白面 士養里 着.
- 11.15. 士養里 発, 咸鏡南道 長津郡 新浦里, 慈江道 前川郡 龍林面 南興里 着.
- 11.15~11.28. 南興里で休息.
- 11.25. 総参謀長 来訪, 軍官会議.

IV. 第2次南進過程

1950.	11.28.	午後5時.	南興里 発. (泰成 ¹ の満1歳誕生日〔돛날〕)(2師4連隊政治部連隊長とともに)
	11.29.	午後3時.	(甲峴嶺)北洞 鷹谷〔매골〕着.
		午後5時.	鷹谷 発.
		午後11時.	上地站〔상지참〕着.
	11.30.	午前11時.	上地站 発.
	12.1.	午前2時.	咸之洞〔함지골〕着.
		午前8時.	咸之洞 発.
		午後2時.	平安南道 寧遠郡 成龍面 清幕里 着.
	12.2.	午後1時.	清幕里 発.
		午後5時.	寧遠郡 温和面 温陽里 着. (温泉)
	12.3.		温陽里.
	12.4.	午後1時.	温陽里 発.
		午後6時.	德化面 横川里 着.
	12.5.	午前8時.	横川里 発. 馬蹄嶺.
		午後4時.	咸境南道 永興郡 耀德面 立石里 着.
	12.6.	午後1時.	立石里 発.
		午後6時.	耀德面 花新里 着.
	12.7.	午前3時.	花新里 発.
		午後2時.	横川面 草坪里 着
	12.8.	午前3時.	草坪里 発. 城内駅 通過.
		午後3時.	高原郡 山谷郡 秀山里 着.
	12.9.	午前3時.	秀山里 発
		午後5時.	平安南道 陽德郡 大倫面 士基里 着.
	12.10.	午前4時.	士基里 発.
		午後5時.	江原道 文川郡 豊下面 長安里 着.
	12.11.	午前6時.	長安里 発.
		午後1時.	伊川郡 方丈面 隣原里 原坪 着.
	12.12.	午前8時30分.	原坪 発. 伊川郡 伊川面 開下里 着.
	12.13.	午前7時30分.	開下里 発.
		午後6時.	利川郡 東面 定洞下里 着.
	12.14.	午前10時.	定洞下里 発.
		午後2時.	平康郡 西面 文峰里 着.
	12.15.		文峰里. (2師政治部指導員に任命される)
	12.16.	午前9時30分.	文峰里 発. 北界, 平康
		午後5時.	平康郡 南面 鶴田里 着. (綜合大学党委員長姜庸俊*トナムに平康郡外龍浦*で会う)
	12.17.	午前10時.	鶴田里 発. 金化.
		午後7時.	金化郡 近南面 陽地里 着.
	12.18.		陽地里. (2軍団本部訪問. 嚴武鉉, 田蒙秀先生に会う)(南載 ² の誕生日)
	12.19.	午後11時.	陽地里 発.
	12.20.	午前7時.	華川郡 上西面 蘆洞里 着.
		午後6時.	蘆洞里 発.
	12.21.	午前5時.	華川郡 看東面 梧陰里 着. (空襲)
		午後11時30分.	梧陰里 発.

1 金泰成 (1949～)。金壽卿の次男。

2 李南載 (1919～2019)。金壽卿の妻。

12.22.	午前 4 時.	楊口郡 西面 楸谷里 着.
12.22.	午後 4 時.	楸谷里 発. (38 度線通過)
12.23.	午前 4 時.	春川郡 北山面 照橋里 着. (戦闘)
12.24.	午前 4 時.	照橋里 発. 付近の山上にて. (戦闘)
12.25.	午後 5 時.	山上 発. (敵の防御陣を突破)
12.26.	午前 7 時.	洪川郡 [瑞石面] 魚論里 着. (朝, 敵の不義の襲撃に遭い戦闘)
	午後 9 時.	魚論里 発.
12.27.	午前 6 時.	洪川郡 新南面 金富里 着.
	午後 5 時.	金富里 発.
12.28.	午前 10 時.	洪川郡 内面 山上 着. (地藏里*戦闘)
	午後 5 時.	山上 発.
12.29.	午前 4 時.	洪川郡 瑞石面 水下里 着.
12.30.	午後 2 時.	水下里 発.
12.31.	午前 4 時.	瑞石面 筓谷里 着.
	午後 2 時.	筓谷里 発.
	午後 10 時.	瑞石面 栗實 [속실] 着. (山上で宿泊)
1951. 1.1.	午前 6 時.	栗實発. チルチェ [질재] 通過
	午前 11 時.	横城郡 甲川面 新垓里 着.
	午後 4 時.	新垓里 発. (4 連隊に出張)
1.2.	午前 4 時.	横城郡 屯内面 永浪里 着. (空襲)
	午後 10 時.	永浪里 発.
1.3.	午前 4 時.	横城郡 甲川面 檢斗里* 着.
1.4.		檢斗里*.
1.5.	午後 6 時.	檢斗里* 発. (師団に戻る)
1.6.	午前 2 時.	横城郡 屯内面 玄川里 着. 山上で休息. (惠慈 ³ の誕生日)
1.7.	午前 1 時 30 分.	玄川里 発. [井谷面] 安興里 通過. (戦闘)
	午前 10 時.	横城郡 安興面 古日里 着.
	午後 6 時 30 分.	古日里 発.
1.8.	午前 4 時.	寧越郡 南面 斗南里 着.
1.9.	午前 1 時.	斗南里 発.
	午前 10 時.	寧越郡 酒泉面 酒泉里 着.
	午後 2 時.	酒泉里 発.
1.10.	午前 5 時.	寧越郡 南面 土橋里 着.
1.10.	午後 6 時.	土橋里 発.
1.11.	午前 6 時.	忠清北道 丹陽郡 魚上川面 方北里 着.
1.12.	午後 7 時 30 分.	方北里 発.
1.13.	午前 8 時.	丹陽郡 大崗面 水村里 着.
1.14.	午後 11 時 30 分.	水村里 発. (米軍捕虜護送)
1.15.	午後 1 時.	丹陽郡 佳谷面 於依谷里 着. (訓民正音創成記念日 ⁴)
1.16.	午後 9 時 30 分.	於依谷里 発. (國望峯, 小白山, ヌリモッチェ [느리목재] 通過)
1.17.	午前 5 時.	慶尚北道 榮州郡 丹山面 坐石里 着.
1.18.	午後 1 時.	坐石里 発.

3 金惠慈 (1944-1991)。金壽卿の長女。

4 北朝鮮では 1948 年より、この日を訓民正音記念日としている。そのように定められるに際しては金壽卿も重要な役割を果たした。拙稿「訓民正音創制記念日の南北間の違いをめぐって」『사학교토회보 (社協京都会報)』21、2019 年を参照。

- 1.19. 午前2時. 忠清北道 丹陽郡 永春面 南川里 着.
午後8時. 南川里 発.
- 1.20. 午前6時. 江原道 寧越郡 南面 助田里 着.
午後7時. 助田里 発.
- 1.22. 午前3時. 寧越郡 北面 德上里 着.
午後11時. 德上里 発. (米軍捕虜13名, 朝鮮人1名護送)
- 1.24. 午前6時30分. 平昌郡 平昌面 泉洞里 着.
午後11時. 泉洞里 発.
- 1.25. 午前5時. 平昌面 ?里 着.
- 1.26. 午前2時. 平昌面 ?里 発.
午前7時. 平昌郡 芳林面 芳林里 着.
午前2時. 芳林里 発.
午前6時. 芳林面 桂村里 月岩洞 着.
午後11時. 月岩洞 発.
- 1.28. 午前1時. 芳林面 桂村里 着.
- 1.29. 午前3時. 桂村里 発.
午前6時. 桂村里 蒼水洞 着.
- 1.30. 午前8時. 蒼水洞 発.
午後5時. 芳林面 介水里 着.
- 1.31. 午前4時. 介水里 発.
午前7時. 芳林面 柳浦里 着.
午後7時. 柳浦里 師団政治部 宿营地 着.
- 2.1. 師団政治部 宿营地
- 2.2. 午後6時. 柳浦里 発.
- 2.3. 午後1時. 芳林面 月岩洞 着.
- 2.4. 午後6時. 月岩洞 発.
- 2.5. 午前10時. 平昌郡 大和面 ?里 着.
午後6時. ?里 発.
- 2.6. 午後3時. 平昌郡 蓬坪面 白玉浦里 着.
- 2.7. 午前9時. 白玉浦里 発. 綿溫里.
午後5時. 眞鳥里 着.
- 2.8. 午前8時. 眞鳥里 発.
午前10時. 横城郡 屯内面 雪橋里 着.
- 2.9.~2.12. 屯内面 雪橋里.
- 2.13. 午前4時. 雪橋里 発.
午前6時. 屯内面 自浦〔自谷〕里 着.
午後7時. 自浦里 発.
午後10時. 屯内面 陽地里* (中秋村*) 着.
- 2.14. 午後4時. 陽地里 発.
- 2.15. 午前6時. 平昌郡 平昌面 河一里 着.
- 2.16. 午後1時. 河一里 発.
午後5時. 平昌郡〔平昌面〕雷雲里 着. (2軍団幹部部へ)
- 2.17. 雷雲里. (朝鮮人民軍から除隊となる)

V. 朝鮮人民軍を除隊して

1951. 2.18. 午前11時30分. 雷雲里 発. (労働新聞社黄東植*同志とともに)
午後4時. 平昌郡 芳林面〔桂村里〕水洞 着.

- 2.19. 午前9時. 水洞 発.
午後5時. 横城郡 屯内面 自浦〔自谷〕里 着.
- 2.20. 午前10時. 自浦里 発. 屯内面 古時里 着. (2軍団後方部)
- 2.21. 午前0時30分. 古時里 発. [自動車, 野村里*まで]
午前6時. 洪川郡 瑞石面 野村里 (魚論里) 着.
- 2.22. 野村里.
- 2.23. 午後8時. 野村里 発. [徒歩]
- 2.24. 午前2時. 洪川郡 化村面 ?里 着.
午前8時. ?里 発.
午後3時. 化村面 外三浦里 着.
- 2.25. 午前0時30分. 外三浦里 発.
午前3時. 化村面 九成浦里 (ペギロンコル〔백일언골〕) 着.
午前9時. 九成浦里 発.
午後4時. 春川郡 東山面 新内里* 着.
- 2.26. 午前8時. 新内里* 発.
午後10時. 春川着. (校雲洞*. 2軍団運輸部で宿泊)
- 2.27. 2軍団 運輸部. (春川)
- 2.28. 午後8時30分. 春川 発. [自動車]
- 3.1. 午前6時. 華川郡 上西面 九雲里 着. (惠英⁵の誕生日)
午後7時. 九雲里 発.
- 3.2. 午前6時. 鐵原郡 鐵原面 栗梨里 (龍譚*) 着.
午後7時. 栗梨里 発.
- 3.3. 午前5時. 平壤 着.
- 3.11. 午後8時30分. 中和郡 南串面 坪湖里 着. (金日成綜合大学 教員集結所)

5 金惠英 (1948～)。金壽卿の次女。

